

「私ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃の期間が満ちるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。そこで私は、顔を神である主に向けて断食をし、粗布をまとして灰をかぶり、祈りと哀願をもって主を求めた。」

ダニエル書9章2、3節

ダニエル書のキーワードの一つは「いと高き神」です。イスラエル人が捕らえ移されたバビロンは、イスラエル人が解放される前に滅亡し、メディア、ペルシャがその座を奪います（5章）。イスラエル人は捕囚の地でも世に翻弄されました。しかし、この世の権力を超えて「いと高き神」が世界の真の統治者であり、主に信頼する者を堅く守ってくださいとダニエル書は教えます。

中央政界から遠くなかったダニエルはバビロンの崩壊を目の当たりにして、主が「いと高き神」であることを一層厳粛に受け止

めたことでしよう。それはダニエルをますますみことばと祈りに向かわせ、捕囚が終わる日が近いことを悟らせました（2）。

主のご計画を知ったダニエルはイスラエルのために祈ります。彼は「私の神、私の主」（4）と繰り返し呼びかけます。主を信じる者は、「いと高き神」を「私の神、私の主」と親しく呼べる恵みの関係にあるのです。

その祈りは他者の重荷を担うものでした。「粗布をまとして灰をかぶり、祈り」（3）とは悔い改めの姿です。ダニエルはイスラエルの罪を自分の重荷として担いました。

「灰をかぶる」とは新約聖書の観点では「仕える」ということです。「仕える」を意味するギリシャ語「ディアコニア」には、「仕える者が灰をかぶる」という意味が込められています。ダニエルの祈りは主に仕え、他者に仕える祈りでした。そんなダニエルに主は未来の預言を示しました（20～27）。

「油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない」（26）とは十字架を示します。ダニエルは祈りのうちに主の救いを見ました。

これはダニエルの晩年の出来事でした。彼の祈りは次の世代のためであり、それは確かに未来に繋がりました。私たちもダニエルのように、暗闇の時代のために執り成し、次の時代に繋げる祈りをささげたいと思います。（泰）

【礼拝説教について】

今回は3年1サイクルで組んだカリキュラムもいよいよ締め括りです。残るはテモテへの手紙第一・第二と黙示録となりました。

*テモテへの手紙第一・第二

パウロから愛弟子のテモテへ宛てた手紙です。テモテはパウロの第2回伝送旅行に同伴し、パウロを助けました。その後はエペソ教会の監督を務めるなど、用いられました。そんなテモテに対して、パウロは牧会者としての教えを綴っています。特に、第二の手紙はパウロの絶筆と言える手紙で、遺言的な厳肅さをもつて書かれています。

*ヨハネの黙示録

・受験生のためにお祈りください。人生の大きな岐路を迎えています。今年はコロナ禍や大学では制度の変更もあり例年とは違う戦いでもあるようです。

中学受験はすでに終わり、高校受験、大学受験は真っ只中です。すでに良い報告も受けています。主の最善に導かれるように、また困難の中で本当の助け主を見出せるように、どうぞお祈りください。

聖書で一番最後に書かれたと言われます。世界の終末についての預言であるため非常に難解で、内容の解釈には十分気をつけなければなりません。世の終わりという重く恐ろしいテーマですが、主を信じる者には究極的な勝利と安息が与えられることを示しており、希望のメッセージが書かれている書です。